

秋田

秋田支局

〒010-0951

秋田市山王2の1の53

秋田山王21ビル8階

018-823-2181

フックス 018-823-2183

ホームページ

http://mainichi.jp/akita/

Eメール

akita@mainichi.co.jp

購読・配達のお問い合わせ

☎ 0120-468-012

(6:00~20:00、日・祝日は~17:00)

秋田中央・東部 018-864-4522

横手 0182-32-3049

沢井 0183-72-9000

能代 0185-52-7612

大館 0186-42-0432

秋田毎日広告社 018-864-4120

行政処分について報道陣に説明する(左から)山形市の奥山泰子子ども未来部長、長沢典和指導監査室長—山形市役所で

山形市行政処分



性的虐待「非常に悪質」 こども園受け入れ停止

山形市内の認定こども園の男性園長が複数の園児に性的虐待をした問題で、市は3日、新たな園児受け入れを11月から1年間停止する行政処分とし、記者会見で処分理由を説明した。同市では前例がない厳しい処分に踏み切ったという。市こども未来課指導監査室の長沢典和室長は報道陣の取材に「非常に悪質であってはならない」と指摘した。

市によると、60代男性園長は2022年4月以降、男女4人の園児に対し、おむつを下げる▽下半身を指して部位の名称を聞く▽下半身を服の上から触る—などの虐待行為があったと認定した。市は複数の職員に聞き取り調査を実施し、「子どもの人格を尊重しない行為」にあたることを判断。給付金約1100万円の不正請求もあったことから、子ども子育て支援法に基づき、園を運営する学校法人を処分した。

園長は3日、代理人を通じて「このような事

「津軽塗」若い職人が奮闘



映画「バカ塗りの娘」の一場面©2023 バカ塗りの娘製作委員会

映画公開

漆という漢字の由来は「水」と「木」だ。樹液など自然素材で作る上、漆器は日本が誇る伝統工芸で、輪島塗や鎌倉彫、木曾漆器など多くの種類がある。タイトルは「バカ塗りの娘」。津軽塗は何十もの工程があるため「ばか塗り」と呼ばれる。津軽塗は、自分も職人になる。弘前市に住む23歳の主人公・美也子は津軽塗職人の父を手伝ううちに、自分も職人になる。弘前市に住む23歳の主人公・美也子は津軽塗職人の父を手伝ううちに、自分も職人になる。

8月下旬、市の職業訓練施設で、研修生の佐藤桂子さん(39)が紫色のおわんに細かな筆



厳しい現状も

実際の津軽塗でも職人を志し、弘前市などによる育成事業に参加している若者らがいる。

しょっぱい食事を改善を

「地域の好み」変えられる?

漬物やみそ汁などの「しょっぱい味」を改善しようと、秋田県能代市で地域ボランティア「食生活改善推進員」の養成が始まった。同市など秋田県北西部は、東北地方でも数少ない推進員不在地域の一つで、県外から移住した人々には「味付けが特にしょっぱい地域」との声も。地元で染み付いた食習慣は変わるのだろうか。【工藤哲】

秋田・能代



秋田県内で食生活改善推進員が不在の地域について説明する斎藤カツ子さん—秋田県能代市で

「私も濃いのと思います。お客さんが望むので」。能代市内のある飲食店で店員に「味が濃いのでは」と尋ねると、「こんな答えが返ってきた。記者は関東育ちで比較的濃い味が好きだが、市内各所で食事をすると、他の地域に比べて特に濃いように感じる。地元の人が聞くと「歴史的に秋田杉の林業が盛んな地域なので肉体的労働者が多く、汗を多くかく仕事が多かった名残では」「味がしょっぱくないと食事をした気がしない」といった声が聞かれる。そうした影響もあってか、この地域には健康づくりを啓発する「食生活改善推進員」が不在。一般財団法人「日本食生活協会」などがまとめた2022年度の年報によると、東北地方で不在なのは、

「推進員」不在 健康懸念し養成

この地域と秋田市、他に福島、宮城県それぞれ一部だけだ。また「能代山本がん予防推進協議会」によると、秋田県のがんによる死亡率は全国の中でも高い状態が続いているが、この地域は県内でも特に死亡率が高く「地域の特性に応じた取り組みが必要」と指摘されている。秋田県の担当者は、日ごろから健康的な食事を啓発する推進員がいらないこの地域の住民の健康状態を懸念し、「推進員の養成を地元自治体に働きかけてきた」という。新型コロナウイルス禍の対応が一段落し、推進員の養成へ一歩踏み出した。

9月26日に開かれた養成講座には7人が出席。能代保健所の担当者が、秋田県の1人1日当たりの食塩摂取量は2016年に10・6gで全国平均(9・9g)を上回っていることや、県が新しい「減塩音頭」で県民に減塩や野菜摂取を呼びかけていることなどを説明した。調理実習で体への負担が少ない薄味付けを実際に確認したほか、県食生活改善推進協議会の斎藤カツ子会長から推進員としてのやりがいや活動内容の紹介もあった。

参加者はすべて女性。斎藤さんは、自身や家族が体調を崩して日々の食生活の大切さを痛感し、活動に加わる人も少なくないと話し「男性も含め、この地域でも仲間を増やして、活動を広げていきたいと思います」と呼びかけた。推進員になるには約20時間の受講が必要で、講座は11月22日まで定期的に実施される。問い合わせは能代市健康づくり課(0185-58-2808)。



食生活改善推進協議会の組織の加入の状況を示す地図。東北地方では秋田、福島、宮城県の一部地域が未加入を示す薄い色になっている。「食生活改善推進員の活動」2022年度・年報より

態に至ったことを重く受け止めており、今後は問題の再発防止に努め、標を正して参る所存です」との談話を発表した。市によると、園が9月に提出した弁明書の中で、性的虐待

わんこそば「じゃんじゃん」食べて

盛岡で世界大会

米紙ニューヨーク・タイムズで紹介され、注目が集まる岩手県名物「わんこそば」の魅力を発信しようと、岩手県は1日、初の「わんこそば世界大会」を盛岡市の盛岡城跡公園で開催した。参加者約80人のうち4割が米国や中国、タイなど海外の7カ国・地域

にルーツのある人たち。必死にそばをかき込み、おわんが積み上げられていくと、会場は歓声で沸いた。子どもは2人1組11チーム、一般は3人1組19チーム。1人2分間で食べた数の合計を競い合った。接待係は「はい、じゃんじゃん」と声をかけながら、勢いよくそばをおわんへ。参加者は口

地元消防チーム優勝

いっぱいそばを詰め、時に楽しそうに、時に苦しうに大食いした。盛岡市の小学校に通うモンゴル出身の小学6年オオルホン・スレデさん(12)は24杯を食し「おいしかった」と満ち足りた。同じモンゴル出身の友達と準優勝を勝ち取った。1人当たりの大会最高を記録したのは優勝した地元消防組合チームの佐藤裕祐さん(51)で、91杯。「リズムが大切」と世界に胸を張った。



初開催された「わんこそば世界大会」でそばを食べる参加者ら—盛岡市で